

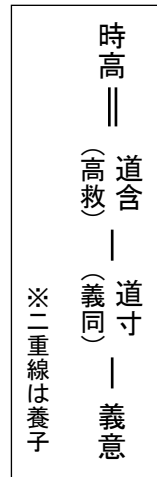


文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

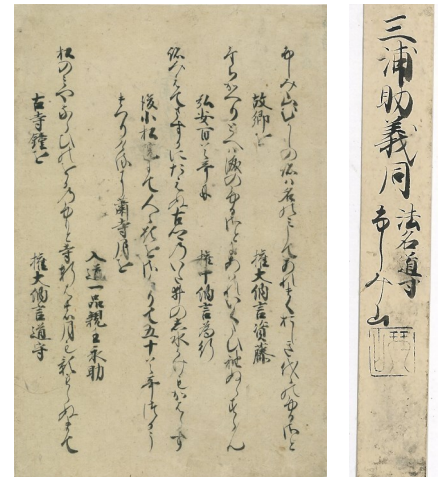
16世紀初頭の三浦半島は、主に三浦氏の勢力下におかれました。それ以前の室町時代の三浦半島は、鎌倉公方足利氏の被官、上杉氏、三浦氏、寺社などの諸勢力の所領が混在する状況下にあります。しかし、15世紀中頃以後、相模守護扇谷上杉氏（おうぎがやつうえすぎし）と結びつきを強めた三浦氏（三浦介家）は、次第に勢力を伸長させ、16世紀初頭には三浦半島を押さえる領主となっていきます。この頃の当主が三浦道寸（義同（よしあつ）と同じ、以下道寸で表記は統一）であり、最盛期には三浦半島の他、相模中部まで勢力を拡大させました。道寸については、後世の軍記類に関連の記述が残されています。例えば、『北条記』によれば、道寸は三浦時高の養子となっていました。時高に実子が生まれると、家督争いが生じ、明應3年（1494）、道寸は時高が籠る新井城（三浦市）を攻め滅ぼし、家督を継承したとされています。ただ、この話には疑義が指摘されています。禅僧万里集九（ばんりしゅうきゅう）の詩文集『梅花無尽蔵』の長享2年（1488）頃の文中には「三浦之道寸翁」の他、「三浦道含」（高救（たかひら）と同じ）という名がみられ、当時、三浦家中に道含という人物が実在していたことが分かりますが、『北条記』等の軍記類にはそのことは記されていません。また、すでに寛正3年（1462）には隠遁していたはずの時高が30年以上経過した明應3年に、突如、軍記類に敵方として記される不自然さ等もあることから、時高から家督が継承されたのは道寸の父である道含であり、時高から道寸に家督継承したとする軍記類の記述は、誤りではないかとの指摘がなされています。そのうえで、道含から道寸への家督相続がなされた時期は、明應3年頃ではないかと推察されています。

武将としての才覚があった道寸ですが、漢詩や和歌に通じるなど、近年、その文化的側面にも注目が集まっています。道寸は、『古今和歌集』を始めとして、様々な和歌集や漢詩文集の書写を熱心に行いました。右上写真の和歌は、『新続古今和歌集』の一部で、道寸が書写したとされる伝三浦道寸筆古筆切（こひつぎれ）です。そもそも、冊子や巻物等は、古くから貴族文化の中で大切に保管されてきました。しかし、後の時代になると、古筆の愛好家が増え、一つ一つの作品に切り離され、断簡の状態を楽しまれていきます。武将で和歌等に通じ、教養が高かった道寸は、そのものと伝えられる古筆切が『新横須賀市史』（資料編 古代中世補遺）に紹介されるものだけでも、15点程確認されています。

三浦氏略系図



伝三浦道寸筆古筆切と極札（筆者蔵）



一方、道寸が活躍した16世紀初頭は、伊豆を勢力下とし、西相模に進出していた伊勢宗瑞（北条早雲）が、東相模にも勢力を拡大しようとしていた時期でした。関東の有力諸将の一族内で対立が続く中、宗瑞はその間隙をぬって東相模へと進出します。永正9年（1512）8月12日、宗瑞は、道寸が守る岡崎城（平塚市・伊勢原市付近）に侵攻し、これを破ります。岡崎城を追われた三浦勢は、住吉城（逗子市）まで後退します。しかし、その後も三浦氏は伊勢氏の勢いを止められず、三浦半島への侵攻を許し、永正13年（1516）7月11日、道寸・義意（よしおき）父子は、被官らとともに「三崎要害」（新井城）で自害しました。源頼朝の平家打倒の拳兵以前から源氏を支えた相模の名門三浦氏は、ここに滅亡しました。『北条五代記』には、道寸辞世の句として、「うつものも討る者もかはらけよ くだけて後はもとのつちくれ」という句が記されています。その後、三浦氏嫡流が代々称した「三浦介」の称号は、会津の蘆名氏に継承されますが、同氏も天正17年（1589）、伊達政宗に敗れ、滅亡しました。

さて、2022年5月から連載を開始した「Café des 三浦一族」は、今号が最終回となりました。これまでご愛読下さいました皆様に心より感謝と御礼を申し上げます。なお、過去のバックナンバーは、まなびかんホームページでご覧いただけますので、ぜひご利用ください。

参考文献：黒田基樹「戦国期の三浦氏」（『三浦氏の研究』峰岸純夫編、名著出版、2008年）、『新横須賀市史 通史編 自然・原始・古代・中世』（横須賀市、2012年）、真鍋淳哉『三浦道寸』（戎光祥出版、2016年）